



教職大学院 Newsletter

No. 41

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2012.4.7

山川異域 風月同天 —教職大学院退職にあたって—

長谷川 義治（福井大学教職大学院）

この3月末をもって教職大学院を退職した。平成19年4月からの5か年を改めて振り返ってみると、教職大学院の開設準備段階からかかわることができたことをうれしく思い、感謝の気持ちでいっぱいである。

教職大学院には、「実務家教員が4割以上」の要件があり、その一人として、福井県教育委員会から派遣されたのが平成19年度。開設当時、実務家教員の「賞味期限」ということも言われ、当初、3か年の予定であったが、2年間の延長があつて、合わせて5年間、大学教員をさせていただいた。この間、大学と教育委員会と橋渡しを常に意識しながら、その役割を私なりに果たしてきたと思っている。このようにできたのも、県・市町教育委員会の教育長、拠点校・連携校の校長をはじめ、多くの方々の御理解と御協力があつてのことであり、心からの感謝を申し上げたい。

教職大学院開設が認可されたのは平成19年12月。当時の黒木哲徳学部長、岩谷正教育地域学部支援室長をはじめ、開設準備にかかわった者が皆で喜び合ったことを昨日のこのように覚えている。そして、早速に、1期生募集に係る説明会を開催したところ、出席者数は予想をはるかに超えて、会場の大会議室は満杯状態になり、資料も不足して、急遽、増し刷りしなければならぬ事態であった。

平成20年4月、教職専門性開発コース15名、スクールリーダー養成コース19名（全員、1年短縮履修）を迎えて、いよいよ「省察と協働」を理念と掲げた福井大学教職大学院がスタート。特に、インターンシップ、週間カンファレンス、毎月の合同カンファレンス、ラウンドテーブル、あるいは、夏期・冬期集中講座が相互に関連し合つて、教職大学院のカリキュラムがダイナミックに展開されていった。

一方、平成19年度に「教職大学院設置に伴う関係機関等会議」として開催していたものを、平成20年度には「教職大学院運営協議会」に衣替えして開催し、県・市町教育委員会や関係学校等との一層の連携を図った。特に、県教育委員会には、公立学校教員募集に当たって、採用内定を得た者が大学院に進学し、修了後に「特別選考」を受験できるという仕組みを新設していただき、現在も、教職大学院に対するとても大きな応援になっている。

私が、教職大学院にかかわることになって以来、持ち続けていた思いがある。それは、スクールリーダー養成コースについては「学校・地域のミドルリーダーが入学する大学院」教職専門性開発コースについては、「教員採用試験に合格した者が進学したくなる大学院」にしたいということである。

前者は、学校改革・授業改革の推進役を果たすことができるような中核教員の育成である。既設大学院への入学者が、そのような意思を明確に持っているとは言いがたい状況も散見されたからである。また、後者は、教員に対する敬意（respect）を再構築する意思を持ち、前者の中堅教員に続くような若手教員の養成である。本学の学部学生の就職状況が、40年前と様変わりしていて、「教員養成学部」の体をなしていないと思えたからであり、また、教員養成の世界的な潮流が「修士レベル」に向かっているからでもあった。今夏、教職専門性開発コースの1名が「特別選考」で受験することになっている。

平成22年3月、教職専門性開発コースの第1期生15名が修了し、今後の活躍を願って色紙を贈ることにした。修了者一人ひとりのことを思いながら、ふさわしい言葉を選んだ。その中の一つが、「山川異域 風月同天」。選んだ理由は、県外の公立学校教員として採用された者が5名いたからでもある。

この言葉を知ったのは、教職大学院開設の2年目の平成21年8月。NHKの番組「生活ほっとモーニング」の中

内容

- 山川異域 風月同天—教職大学院退職にあたって— (1)
- ラウンドテーブル特集
 - 専門職として学び合うコミュニティを培う (3)
 - 協働探究の展開を語る・プロセスを聞き取る (9)
- 公開研究会報告—埼玉県立新座高等学校
 - ・東京大学教育学部附属中等教育学校— (12)
- 平成23年度第2回運営協議会が開催 (14)
- 2011年度長期実践研究報告の目録 (15)
- スタッフ紹介 (16)
- 日本教育方法学会第48回大会のご案内 (16)



で、谷村新司さんが「好きな言葉」として紹介している、私は、これを聞いて、何となくスケールの大きさを感じる、素敵な言葉だなとの印象を持った。早速、インターネットで検索すると、「カナジューの篆刻入門」には、英文で“Mountains and rivers are different, yet the sky and the moon are one and the same.”と訳されており、「鑑真和上が、遣唐使として中国に渡った留学僧の栄叡（ようえい）と普照（ふしょう）という若い僧に、来日するよう切々の訴えられたとき『山川異域風月同天 奇諸仏子 共結来縁』（中国と日本には同じ山川はない。しかしながら、風も月も同じものだ。まことにこれ仏法興隆に有縁の国なり。）という言葉 を挙げて、日本行きを決意したそうだ。この言葉は、長屋王が中国に贈った袈裟に刺繍されていたものだそうだ。」と説明されていた。

後日談であるが、北京市内のあるホテルの庭園で、件の文を刻んだ石碑を見付けて、とても感動したことを覚えている。

平成24年3月に第3期生27名が修了した。2月の長期実践報告会や3月のラウンドテーブルで、彼らの報告・発表を聞いていて、現職教員の院生と若手の院生の学び合いや学校現場と大学との協働が実に見事に展開しており、教職大学院のカリキュラムが定着しつつあることを実感できた。

今後の課題は、この流れを更に充実したものにしていくことであろう。ところが、スクールリーダー養成コースについても、教職専門性開発コースにしても、学生募集に苦勞している。最大の条件は授業料と言われている。教職大学院協会のシンポジウムでも、インセンティブ（刺激・誘引）、処遇等のことが語られていた。もちろん、それが充実することは決して悪いことではないが、それは、所詮、外発的動機付けである。学ぶこと自体が「楽しい」「おもしろい」「価値

がある」などの内発的動機付けに目を向ける必要があると思っている。そもそも、教師になって子供たちに教えたことは内発的動機付けではないか。その教師が、外発的動機付けを優先的に考えるとしたら、矛盾ではないのかと言いたくなる。学部を卒業し、教員免許状を持った者が学ぶ意味である。学ぶ必要がないと思っている者に対して、学ぶ必要性を説くのは、大学院の大きな役割である。それは、教師が子供たちに学ぶ必要性を説明することと相似であろう。教職大学院で学ぶことの意味やだれのために学ぶのかをもう一度問い直してほしいと思う。

先日、NHK「みんなのうた」番組で「なぜ」を聞いた。子供たちが日常の中で抱く疑問と、そんな子供たちの「なぜ？」に、大人たちが優しく答える歌である。

なぜ／ケロボンズ

作詩:平田明子 / 作曲:増田裕子

なぜ 花は咲いてるの？ なぜ 鳥は飛んでいくの？
なぜ 風は吹いてるの？ なぜ 雲は流れるの？

みんな 楽しんでいるの 咲くことを 飛ぶことを
みんな 楽しんでいるの 吹くこと 流れることを

なぜ 空は広いの？ なぜ 海は青いの？
なぜ 川は流れるの？ なぜ 星はまたたくの？

みんな 楽しんでいるの 広いこと 青いこと
みんな 楽しんでいるの 流れること またたくことを

みんな 楽しんでいるの 広いこと 青いこと
みんな 楽しんでいるの 流れること またたくことを

大人の答えが、素朴と言うか、単純明快で言うか、すばらしい。「そもそも、生きているって楽しいことだ」と言いたくなるほど、心が熱くなった。

今、福井大学教職大学院は、県教育委員会等との連携をはじめ、様々な意味で、各方面から注目されている。しかし、全国の教職大学院が注目されているかとなると疑問符が付く。本学でも、既設大学院との違いは伝わっていないし、正直なところ、福井県内の教員の中に、「教職員大学」と言われる方も少なくない。教職大学院の取組や修了者の資質能力が評価され、認知度が上がることを期待したい。それには、まずは、院生も大学教員も、「学ぶ」ことを楽しむことだと思う。北関東の地からではあるが、一層の発展を祈りたい。

ラウンドテーブル特集

2012年3月3日(土)～4日(日)の2日間にわたり、「日本の教師教育改革のための福井会議2012」および「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2012」が福井大学で開催された。今回は新たに「教科」のゾーンが立ち上げられ、1日目のセッションは、Zone A (学校)、Zone B (教師)、Zone C (コミュニティ)、Zone D (教科)の4つに分かれた。各会場で展開された示唆に富む発表が導火線の役割を果たし、2日目のクロスセッションにおける「語り」「傾聴」「振り返り」が熱を帯びた。380名を超える参加者は福井の地で何を思ったのか。参加者の言葉がヒントになるのではないだろうか。

専門職として学び合うコミュニティを培う

教師も学びあい育ちあう学校づくり

「どうすれば継続できる？」本校の研修について話をきいてくださった皆さんから繰り返し出された質問です。その度に私は戸惑い、「“継続”が目的ではありません」としかお答えできませんでした。

その質問の真意は何だったのか、今改めて問い直しています。「すべての子どもの学びの保障」のために「授業研究を研修の中軸に据えた」学校である浜之郷小学校。授業研究とは、授業をひらき、個々の子どもの活動をつぶさに観察し、省察し、授業をつくることです。それが本校の教師たちには「当たり前」です。ポスターセッションでの各校の取り組みを伺っていると、「理解してくれる職員が少ない」「校内研修を一から立ち上げる大変さ」と体制づくりからの困難を語っておられました。「当たり前である幸せ」を感じました。浜之郷が14年間変わらずに教室をひらき続けられていることにお答えできなくても、“秘密”は探る責任があると感じました。

リアクションが大きかった「若い教師が育つ」こと、そこに糸口を探ろうと振り返ってみても、やっぱり特別なことは何一つしていないのです。ただ、その人自身が考え、気づく瞬間まで『待つ』ということ。

1日目のセッションⅢで、本校と福井の美方高校の実践報告があった。美方高校の2人の先生は若く、情熱にあふれていた。美方高校の教育実践を推進する「MGP」。「美方元気プロジェクト」の略だそうだが、うまい。名前からしても、今にも動き出しそうなネーミングである。

美方高校には若い教員を育てる土壌があるのか、若いリーダーが学校を動かしていく。「教科の枠を超えた授業・研究会」を実践し、授業スキル・生徒支援方法・生徒の様子を、全職員での共有を図る。授業では生徒一人一人の授業における「学び」の変容を見とる。生徒の「学び」を中心とした、教員が学びあうコミュニティが見事に培われている。

Zone A/茅ヶ崎市立浜之郷小学校

高橋 みずほ

教えたいのなら言葉で諭すのではなく、自分の活動で見せるということ。その何気ないことを誰に強制されるでもなく、私がしてもらったから次の人にする、と続いていきます。『継続』の秘訣は「自分がしてもらってよかった」という単純な心地よさ・よい経験の広がりなのかもしれません。

子どもとともに教師も育ちあう学校で、これからもあり続けたいと思います。



Zone A/滋賀県立彦根西高等学校

紫雲 智道

本校は「学びの共同体」に取り組みだして3年、その精神である「同僚性」を大切にしている。「学びの共同体」に「はまる」のは50代の教員という話を聞く。わずかな教員生活を残して、優れた教育実践に出会い、「やりたい」と思うのである。私も50代であるが、今回「若いリーダーを育てなければいけない」と強く思った。

美方高校の先生と同じく、「探究的な問い」を發し、生徒を揺さぶりたい(美方高校の先生が、生徒が自分と違う意見に出会うことを「揺さぶられる」と表現していた)。「学び」は他人との出会い、自分との出会いである。私も生徒とともに、揺さぶられ、新たな自分を発見したい。

Zone A/千葉大学教育学部附属特別支援学校

岡 美津子

私は、今回初めて福井ラウンドテーブルに参加させていただきました。2日間通して感じたことは、各学校の教員に関わらず、学生や公民館の方など様々な教育に携わる人々の「教育に対する熱い思い」です。

1日目は、Zone Aに参加しました。Session Iは、福井県内外の小・中・高・特別支援のポスター報告でした。ロビーには、報告者と参観者の熱気でいっぱいでした。各学校の取り組みについて、それぞれ報告があり、校種が違っていても、お互いの学校の共通点・相違点を学ぶことができました。Session IIのシンポ



ジウムでは、教員のあり方、教員同士での「学び合い」の大切さを知ることができました。私も、これからはミドルリーダーとして学校づくりに携わることが増えていくと思います。それに向けても、とてもいい勉強になりました。Session IIIでは、本校の実践を報告させていただきました。本校では、「子どもたちが主体的に活動し、共に生きる豊かな学校生活」をめざして、日々授業づくり、学校づくりに努めています。参加された方々は、その報告を真剣に聴いてくださり、報告を聴いて感じたこと、疑問に思うことを挙げてくださいました。それに答えていくことにより、私自身、本校の実践に対する理解をより深めることができました。また、福井大学教育地域科学部附属特別支援学校の実践を知り、同じ特別支援学校としての共通点や相違点を感じ、私の中で特別支援教育への理解の幅が広がったように感じました。

今回のラウンドテーブルでは、全国の方々と情報交換し、教育への理解を深め合い、教育への思いを高め合うことができました。今後も特別支援を必要とする子どもたちのよりよい学校生活づくりに微力ながら努めていきたいと思っています。このような貴重な体験をすることができ、深く感謝申し上げます。

Zone A/福井県立美方高等学校

滝 民恵

Session Iでは、ポスターセッションの中で、美方高校の取組を、プロジェクトチームメンバーの1人である丸谷寛教諭から発表させていただきました。参加されている方々から質問やご意見をいただく中で、学校の枠を越えて深く学び合うことができたと思っています。高等学校で教科の枠を越えて授業研究会を実施することの意味と、授業の中で生徒の学びに寄り添うことの意義について考えることができました。

私自身、平成21・22年度の2年間、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースで学ばせていただきましたが、今回、ラウンドテーブルへの参加を通して、改めて「学ぶことは自己変革である」ということを痛感しています。

Session IIでは、藤江康彦准教授（東京大学大学院教育学研究科）、牧田秀昭先生（福井県教育研究所）、木村優准教授（福井大学）をコーディネーターとして、「学習の展開を捉える力」について問題提起がなされました。この中で、特に、授業参観や授業研究会をコミュニティにおいて行うことの意味について、「子どもの『学ぶ姿』の多様な見方…子どもの学びが立体的に見えてくる」「ひとりの見方を超えて…同一の子どもの学びでも、見る教師によって様々に見える」「時間や空間を超えて…ほかの教師が、ほかの教科での様子を見ている」というお話から、美方高校の取組を振り返ることができました。自分らしい授業とは、自己実現できる（生徒も教師も）授業であり、授

業者それぞれに授業や生徒への願いがあって、それが達成されることが教師にとって「学んだ実感」があるのだと思います。

Session IIIでは、滋賀県立彦根西高等学校の取組を傾聴することができました。「学びの共同体」（東京大学・学校教育高度化センター・基礎学力向上プロジェクト）の導入によって授業研究会が大きく変化したこと、生徒の協働学習を指導しつつ教師たちも授業研究会に取り組むことで、教師自身も協働的に学ぶことの意味を見つけて、学び成長し続けるようになりつつあるということ、そして、教師の生徒を見る目に変化が生じたということに感銘を受けました。「学びの共同体」によって、学校が「学ぶ組織」になりつつあるということが、Session IIの「授業には、学校の在りようが映し出される」というお話と重なり、非常に心に残りました。

Session IIとSession IIIで行われたワークショップ形式のセッションの持ち方にも、福井大学教職大学院が目指そうとしている思いを、深く感じるすることができました。参加者が主体となって学びを深める工夫がなされていることに、改めて感動を覚えました。ラウンドテーブルに参加させていただき、本当に良かったと思っています。ラウンドテーブルで学んだことを、美方高校の生徒達や先生方に返していきたいと思っています。

Zone B/横浜市教育委員会教職員育成課
木村 奨

本年度、横浜市教育委員会では文部科学省の「教員の資質能力に係る調査研究事業」に取り組んでおります。教員の資質能力向上には「指導主事の育成・活用への取組」が不可欠であると考えています。その一つとして教育委員会と大学との連携はかり、教師教育を見直し、学び続ける教師を今後どのように育てていくかという課題と向き合っています。福井大学をはじめ



として現在行われている教師教育改革と組織間連携のいろいろな考え方や実践から、本市が取り組むべきヒントをいただきたいと思い「福井会議2012」に参加させていただきました。

Session I のポスターセッションでは多くの実践事例が紹介されていて、今後を考えるキーワードやヒントを多くいただくことができました。Session II の横須賀先生の講演では教師教育改革の方向性を、松木先生の講演では非常に効果を上げられている実践とこれからの教員育成の在り方についてご示唆いただき、考える視点・方策が私たちの中で整理することができました。Session III での各取組の報告でも多くのヒントをいただきました。

参加された方が得るものが非常に多かったと感じる会であり、運営についても学ばせていただきました。そして何よりも、本市が取り組む教師教育改革と組織間連携にとって非常に実りの多い会への参加となりました。関係された皆様にお礼申し上げます。

Zone C/早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
秋吉 恵

大学を卒業して十数年、久しぶりに付き合う大学生は実に忙しい。授業に、バイトに、サークルに、ボランティア活動に毎日駆け回っている。しかし、こうした多様な経験を、豊かに語る学生はほんの一握りに過ぎない。追われるように新たな経験を求め続け、忙しさにおぼれて自分が何ものであるのか見失っているようにみえる。

大学生が自分の経験を振り返り生き方を見出す支援をする、そんな教育が必要とされている。こうした実感から、大学生がボランティア経験を振り返り、言葉に表すための方法を模索してきた。この振り返りによって、学生がそれまで培ってきた価値観を見直し、そこで得た新たな価値観を働き方や暮らし方など生き方と関係づけられることに気が付き始めていた。

そんな私に、福井大学教職大学院ラウンドテーブルは、新たな発見をもたらしてくれた。「経験を振り返り生き方を紡ぐ」という大学生における試みは、「実践を省察し言語化する」という表現で、小学生から高齢者まで様々な現場で試みられていたのだ。

経験を振り返り言語化するという行為は、若者の生き方紡ぎのみならず、地域づくりや教育現場の改善に

まで必要とされていることなのだ。支援者の工夫次第では、年齢や経験の質を問わずに応用できる手法なのだ。とはいえ、大学生だけで、経験を振り返り考察を深められる学びあいのコミュニティを作れるほど、我々の方法論は成熟していない。手法を洗練させれば実現できるのか、それともこうした支援のできる教員を増やすべきなのか。このラウンドテーブルを機に、私自身も実践を省察し、これからの実践への問いを深め始めている。



Zone D/福井県立藤島高等学校
南部 泰啓

ラウンドテーブルでの話題提供の依頼を受け、まず心に浮かんだこと ⇒ 普段の実践をネタにさせていただき、皆さんに自由に考えていただこう…という思いだった。日々の授業では特別高度なことをしているわ

けではない。でもネタ探しにだけは、日頃から寸暇を惜しまず、取り組んでいる。生徒の心を動かし、知的好奇心を起動させ、迷い、他人の考えを聞き、折り合いをつけ、様々な「納得解」をひねり出す。そんなし

かけをお膳立てするには、なにより「問い」そのものの品質が問題になってくる。問いがうまく立ち上がれば、授業は成功。満足度は格段に高くなる。コツを1つだけ。授業でこんなことがネタになる？最初に意外性・サプライズがあれば、生徒の食いつきがいい。中身もまったく結びつかないような要素が組み合わさっているとさらに具合がいい。今回はブタを主人公にしたネタで、日本のギャグマンガ『浩とブタ公』、アメリカ映画『ベイブ』、NHKドキュメント『ひろ君と子豚』、邦画『ブタがいた教室』と組み合わせ、さらに思想（プラグマティズム・実存主義・老荘思想等）、宗教（仏教・儒教・キリスト教）、日米比較文化、生命倫理、死生観、食育等を混在させた問いを扱った130名の合同授業の実践を紹介させていただいた。実際は100分の時間をとってじっくり話し合いをさせた内容をわずか20分で再現・体験していただくというムチャな設定で、参加者の方々には消化不良を起こさせてしまったであろうと推測している。深謝。さて具体的な問いの内容であるが、6年生のクラスに子豚を連れてきた若き担任教師。目的は1年間みんなで飼育して卒業式当日に成長したブタを解体し、全員でおいしくいただくという計画。家畜というよりクラスのアイドルのペットとなっていく「Pーちゃん（子豚の名前）」。いざ当日が迫ってくると食べる ⇄ 食べないでクラスは騒然となってくる。高校生にも、参加していただいた皆さんにも「あなたが担任ならばどうしますか？」が問いである。クラスの小学生達はみんな真剣に議論を重ねた。そして最後の決断はあなたがしなければならぬこととなった…。さあ、どうする？もちろんこれは通称“鳥山実践”で知られる実際に90



年代にあった記録が元になっている。「命をいただく」ことの自覚を促す荒療治か、アニマルセラピーにも関連した「命を大切にすること」という思いやりの心を重視させるのか、さらには現場での現実的対応はどうあるべきか、単純なオルタナティブの選択では済まない、難題である。選択肢は3つ。①当初の約束通り、みんなで食べる。②殺さないで下級生に世話を引き継いでもらう。③現実的対応として食肉センターに引き取ってもらう。どの答えを選ぶにしても一長一短な状況となる。2カ月前の高校2年生による班別話し合いによって出された結果は12班中、11班！が①を選択するという偏りが生じた（個別の選択では①が75%、②が11%、③が14%）。②を選んだのは1班だけ。みんなの選択は本当に正しいのか…？生徒達には①への反論、想定されるトラブル等を提示して、その結論を論駁していく。生徒達の表情にはとまどいの色が…。大成功！ まだまだ授業は終わりません…。

スクールリーダー養成コース1年／坂井市立丸岡南中学校 遠藤 正宏

3月3～4日にかけて、福井大学のラウンドテーブルに参加しました。最初は丸岡南中学校の取り組みについてポスターセッションを行いました。短い時間で伝わったかどうか不安ですが、取り組みについて話すことはできたと思います。また、他の学校の発表も拝見させていただきました。どの先生のどの発表も、熱意あふれるもので、大変参考になりました。この後、「授業づくりと評価」では、京都大学の松下先生のお話をお聞きしました。



「表現」の力をはかるパフォーマンス評価の重要性と課題について考えさせられました。次のテーマ別話し合いでは、大学生の方の発表と、公民館主事の方の発表をお聞きしました。どちらも中学校の現場では味わうことのできない課題について考えることができました。

4日はいよいよ発表です。自分の1年間のまとめとして、精一杯話しました。語っているとき、または質問に対して答えているときには、自分のやってきた取り組みについての認識がさらに深まっていくようでした。他の現場の先生方の発表を聞きましたが、「どうせ他の現場のこと」と他人事のように考えるのではなく、取り組みについて自分のことのように捉え、考えて語り合っていました。本当に良い刺激をいただき、心地よい疲労感に包まれて終了しました。

2日間のラウンドテーブルを終えて、自分なりに身の丈に合ったことができたと思いました。語り合った方々から新しい刺激をいただき、来年度に向けての意欲が生まれてきました。ありがとうございました。

スクールリーダー養成コース1年／福井市足羽第一中学校

川榮 やよい

3月3日(土)

Session I は、ポスターセッションであった。私は ZoneA「学校」を見た。中でも印象的だったのは、東京都墨田区文花中学校の発表だった。文花中学校は夜間中学である。事情があって（外国人、不登校等）、中学校を卒業していない人は誰でも入学できる。文花中学校のパンフレットには、生徒が書いた詩が載っている。平仮名が読めるようになり、1人で電車に乗れるようになったこと、数字がわかり、電話がかけられるようになったうれしさがつづられている。

このような夜間中学は8都府県に35校ある。不登校からのひきこもりが増えている今日、このような学校が全国に必要だと思う。福井県には残念ながら1校もない。

Session II は、4つに分かれてのシンポジウムであった。私は ZoneD「教科」に参加した。京都大学・高等教育研究開発推進センターの松下佳代先生の「学びの可視化と評価～パフォーマンス評価を中心に～」という発表を聞いた。パフォーマンス評価という言葉聞いたのは初めてだったが、まずは、授業を集団での活動にする必要があると思った。

Session III も4つに分かれてのフォーラムであった。私は、ZoneD「教科」に参加した。3つの発表があったが、至民中学校の堂下先生と中村先生による発表が興

味深かった。家庭科と美術科がコラボして、絵本を作るという授業であったが、できた作品もすばらしく、教員の協働という面からも参考になった。私は国語科の教員だが、国語と家庭科のコラボで絵本作りに取り組めるのではないかと思った。

3月4日(日)

Session IV では、小グループに分かれてそれぞれの発表を聞き合い話し合う活動を行った。私のグループは、3つの発表があった。1つ目は、堀川小学校の1年生を担当した先生の生活科でのある児童の成長を追った発表だった。細かく丁寧に子どもの内面を見とって温かい実践だった。2つめは、公民館の主事が夏祭りを企画運営する内容だった。様々な人の様々な思いをまとめていく大変さがよくわかった。最後は私の1年間のまとめを発表した。誰かにわかってもらえるように書くことで、自分の実践を振り返り、次へ進むことができることを実感した。

教職大学院での1年が終わろうとしているが、入学して本当によかったと思っている。ここに来なかったら絶対に会わなかったであろう人と会うことができ、読まなかったであろう本を読むことができ、辛い思いを語り合うことのできる仲間ができた。次年度も楽しみである。

スクールリーダー養成コース2年／越前市武生第二中学校

久島 晋

3月3日・4日に開催された『実践研究福井ラウンドテーブル2012 spring sessions』に参加した。私は6回目の参加になるが、今回で22回目の開催になることを知り、ラウンドテーブルの歴史と重みを改めて感じた。

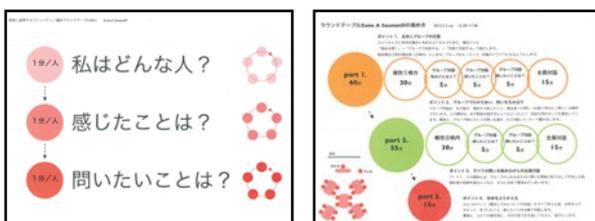
3日の各 session では挑戦的な取組も見られ、福井大学教職大学院スタッフの歩み続ける姿勢が感じられた。session II は、Zone A「学習の展開をとらえる力」で藤江先生の話を押聴したが、うなずけることばかりであり、今後の校内での実践における大きな指針を与えてもらった。session III では、墨田区立文花中学校（夜間中学校）の話に驚き、武生第三中学校の取組に感銘を受けた。ここでは、これまでの実践発表の聴き方とは大きく異なり、小グループで話し合い、発表者に問いかけるという形式がとられた。

惜しむらくは時間が短く、話し合いが盛り上がりかけたときに質問タイムに移ったことである。校内での

研修会でも同様であるが、warm upに時間がかかってしまい、話し合いが深まり始めたところで時間切れになることがあり、コーディネーターの役割が非常に大きくなる。そのことを改めて感じた時間であった。

2日目のラウンドテーブルでは、報告させていただく機会をいただいた。2本目の発表がなかったため、ゆっくりと話をすることができた。また、コーディネーターの松本敏先生のおかげで、和やかな雰囲気の中で、じっくりと自分の実践について話し合いをできたことは、非常にありがたかった。語り合いの中で、自分の実践を振り返ることができ、新たな気付きが得られることがラウンドテーブルの良さである。教職大学院での2年間の学びをラウンドテーブルで終えられたことは、次年度への活力源になった。

2日間の日程の中で、多くのことを学べ、明日からの実践へのエネルギーと新たな指針を得られるラウンドテーブルは、教育実践者にとって、大変有意義なものである。私は教職大学院を卒業するが、今後もラウンドテーブルに参加し、自分の実践に深みを持たせていきたい。



養成教職専門性開発コース1年／福井市至民中学校インターンシップ

平野 貴大

1日目のSessionⅢは、『教科を問い直す なぜ学ぶのか』というテーマに非常に興味があったのでZone Dに参加した。その中で藤島高校の南部先生がおっしゃっていた「一見関連がなさそうなものを関連付けていくことがある時イノベーションを起こすきっかけとなる」という言葉が強く印象に残っている。私は、自身の専門である数学を学ぶ意味は、数学を学ぶことによって身の回りにある数に対しての見方が変わり、世界を見る目が変わっていくことにあると思っているので、そういった力をつけるためにもなるべく数学以外の世界と子どもたちの学びを関連付けることをしていかなければならないと感じた。同じテーブルの先生からは、「『教科を問い直す』ということは、『教科を壊す』ことだと考えている。なぜ学ぶのかということとは外せないが、何を学ばせたいのかは教科を跨いで共

通するものがあるはず」という意見が上がった。その教科ならではの学びはもちろんあるし、それを度外視することはできないが、学校教育として何を学ばせたいのかを考えていかなければならないということを感じた。

2日目のSessionⅣの福井県特別支援教育センターの大崎先生の発表では、学級崩壊寸前のクラスに対する支援として、ビデオによる授業の振り返りを提案したことによる学校全体の変化についてお聞きした。子どもたちの気配りな行動だけに注目するのではなく、子どもの姿を連続体として捉える授業の見方など、私が普段至民中学校で見ている授業の見方に非常に近く、そうした見方を繰り返すことで学校全体として子どもを見る見方が変わってくるのだな、と感じた。

協働学習のスタートとしてのポスター発表

養成教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校インターンシップ

佐々木 庸介

私たち教職大学院ストレートマスター2年生は、実践を行う傍ら「公教育における教科の意義」を考察してきました。この度のラウンドテーブルで考察してきた過程を発表する機会をいただき、発表に向けて報告書、そして発表ポスターを制作しました。ここではこの準備の過程と発表、そして発表後の省察において学んだことを書きたいと思います。

「公教育における教科の意義」を探究するようになったのは、大学院の実践的な授業がきっかけでした。学校教育という公教育の一部を担う教諭が、「なぜ公教育を行うのか。そして教科は公教育において何を担うのか」を考え続けることはライフワークとして行っていくことが必要だと考えたからです。3ヶ月間の意義を考察する授業では、授業実践を行うために使用してきた学習指導要領の他に、カントやコンドルセ、福澤諭吉が記した、公共性や公教育をめぐるテキストを読みました。子どもに向き合い実践を行うことを中心として行ってきた院生にとって、教育の根本を探るという経験ができました。そして公教育の意義は「より民主的な協働社会の形成を目指すために、協働学習の場を提供すること」ではないかと考えるようになりました。しかし、この段階では教科の意義について考察することができておらず、授業実践と公教育の意義を結びつけることができていませんでした。

そこで授業終了後、公教育の意義を基に教科の意義を考えていくことにしました。夜に院生室に集まり、何度も意見交換を繰り返しながら教科の意義に迫っていきました。院生は国語、英語、理科、社会、保健体育、特別支援教育と専門が異なりますが、全員でこれらの分野すべての意義を考察していきました。すると次第に各教科の共通点や特性が明らかになりました。



そしてこれらを自己の実践と照らし合わせ、省察して今後の課題を考えました。ラウンドテーブルでは考察したことと過程をポスター発表すると同時に、報告書を作り配布しました。発表では多くの方に発表を聴いていただくと共に、「実際に実践ではどのような課題を提示するのか」といったような具体的な質問なども頂き、さらに新たな課題が生まれました。

私たちは、この過程を通して自らが行ってきた授業実践を省察する新たな視点を獲得することができました。以前の私たちは公教育の意義を「豊かに生きていくことができる人を育てること」が目的なのではないかと考えてきましたが、学習を通して「社会契約の主体として人々が学び合う場を形成し互いの学習を支える」ことが目的だと考えるようになりました。これによって「教材研究の意義」「探究することの意義」「子どもをみとることの意義」が大きく変わりました。

また、私たちはポスター発表という形で自らの考えを他者に伝えるために、院生一人ひとりが省察し、概念

を再構成して、言葉を吟味しながら言語化するという協働学習を行いました。終了後の振り返りでは、「この過程に学びの深まりを感じ、共に学び合うことの意義を感じた」と院生全員が省察しています。よって今回の公教育における教科の意義を考察して発表した過

程が、私たちにとって「ライフワークとして『公教育における教科の意義』や『授業観・生徒観・指導観』を協働探究し続けるためのスタート」であったと価値づけています。

協働探究の展開を語る・プロセスを聞き取る

富山市立堀川小学校

滝澤 亨

自分の実践を含めた3つの実践についての話し合いから学び、再確認したのは、立場や環境が違って共通したことがあるということです。それは、「切実な問題こそ成長や発展のきっかけとなること」、そして「問題の解決には他とのかかわりが欠かせないこと」です。

私が参加したテーブルでは次のような実践報告がありました。

1つ目は、地域住民が一体となれるように取り組んでいる夏祭りの事業について、公民館主事の方の報告です。地元で古くから暮らしている人たちと新興住宅地に暮らす人たちとの間に、考え方の違いがあり、自治会への加入率も低い地域の中で、夏祭りが17回も続いています。しかし、実行委員からも事業の廃止論が出る中、部会での会議を頻繁に行い、今後について話し合う検討委員会を立ち上げていきました。それは、祭りの目的を明確にするなど、問題意識をもって語り合う場を設け、住民の意識の変化を促そうとしているのですが、まさにコミュニケーションの場が、コミュニティの土台を確かなものにしていました。また、公民館主事の立場が、住民同士のかかわりを深めるために有効に働いていると思いました。

2つ目の実践は、不応状態になった中学校教諭自身の経験から、その要因と教訓についての報告です。

長く教員としての経験の積み重ねの中で、どうして不応状態に陥ったのかについて、これまでの勤務校でのくらしや自身のくらしぶりを細かく振り返られていました。さらに、現在の勤務校で不応状態になったときの状況や、その前後の周囲の人々とのかかわりから、自分自身をみつめることによって、自らの力で改善の方途を見いだしているものでした。

新たな環境の中で、これまでの経験を生かしながら自分を更新させていくには、身の周りにいる人々とのかかわりを絶やさないことが大切であるということ学びました。

最後に、仲間の姿をきっかけにして自分の思いを打ち明けていく子どもについて、私の実践からの報告でした。子どもは壁にぶつかったとき、仲間がいるからこそ、やればできると思っがんばることができません。しかし、それは子どもに限ったことではなく、教師自身も含めて、誰でも同じではないかと強く感じさせられました。

このラウンドテーブルで貴重な学びを得ることができました。「きっかけ」と「かかわり」を大切に、これからも子どもと向き合い、研鑽を積んでいきたいと意を新たにしているところです。

地域の中で子どもを育てる大切さ

実践研究福井ラウンドテーブル2012にて、福井県の公民館での地域と学校が連携を図った実践を聞いた。その実践は、東日本大震災で被災した村へ、自分たちの地域でついた餅を送ったというものである。公民館の主事が、地域のお年寄りに声をかけ、小中学校へ働きかけ、村にある餅つきの道具をかき集め、12月の初旬に、公民館で地域住民が集まり、餅つきをしたというのである。この取組みを通して、餅のつき方や餅の形の整え方などを指導するお年寄りにふれ、子どもたちは、何でも知っているお年寄りのことを尊敬すると共に、地域の方と協力する楽しさを感じたようだ。また、子どもたちは、困った人を助けることができる喜びから、学校でも「もっと

富山市立堀川小学校

廣瀬 聡

何かができないか」というボランティアの輪が広がったそうだ。

日頃から、私は、自ら問題をみつけ、解決しようと取り組むことのできる子どもの自立を促し、仲間と協力して物事を成し遂げようとする子どもの社会性を養うことが教育の本質であると考えている。これらのことは、学校の中でだけで育むことは難しい。今回の報告にあるような、地域と子どもを結びつけている公民館の存在がとても重要なのではないかと感じた。

今回の報告を聴くことを通して、学校の中だけでなく、子どもを取り巻く環境の中で、子どもを育てる取組みを見いだしていくことが必要であると強く感じた。

福井市啓蒙公民館
南部 まゆみ

さる3月4日、実践研究福井ラウンドテーブル2012に参加させていただきました。

グループセッションで、公民館主事としての実践発表をさせていただき、自分の実践の歩みを初対面の方に理解していただくことの難しさを痛感しました。私は今回、地区の小中高校生を集めて劇団を作り、地元ゆかりの偉人「結城秀康」の功績を伝える劇を文化祭で発表しました。子どもたちは、劇を観た人に秀康への興味を持ってほしいと練習に取り組みました。それと同時に進行で劇中の衣装や道具づくり、背景画下書き、効果音、曲作り、収録等地区住民の力を集めた手作りの劇となりました。でもその実践過程を充分お伝えできたかどうかかなり不安です。

東京都板橋区立赤塚第二中学校の岡部先生は研究実践発表で、授業改善にける熱い思いを語られました。授業導入時、単元の内容やねらいに関わる「気づき」や「驚き」等の高まりを起こさせるような工夫をされています。例として、理科の授業で「秋探し」と称して外に出かけ、虫や植物を採集し、持ち

帰ったものをグループ班ごとに情報収集（図書館やインターネット等）して調べるといふもの。まとめとして新聞を作成してグループで発表します。生徒に「知りたい」「話したい」等の知的欲求を持たせ、「課題解決」のためどのような手順を踏んだらよいか考えて意欲的に学習に取り組ませたいということでした。

また、富山県立堀川小学校で特別支援学級の担任をされている山下先生は、大きなパネル3枚で、自閉的傾向と診断されている少年の農業体験や英語を活かしたゲーム創造、本づくり体験を通じた授業の実践を発表されました。少年が学校（先生）と保護者、同クラスの仲間と関わり、多くの体験を通して成長する過程がよくわかりました。小グループで互いの実践を聴き合うことで、公民館主事と教員の立場は違いますが、学びのプロセスは同じだと感じました。実践を重ね、成功や失敗の中で、気づき、どうするか考え、行動に移したその中からまた課題が見えてきます。今回の経験を参考に、地域でいかに問題意識をもって意欲的に学びや実践に取り組んでもらえるか工夫していきたいと思ひます。

滋賀県立彦根西高校
夏原 常明

福井ラウンドテーブルには初参加でした。Session IやII、さらにラウンドテーブルでの報告依頼を受けて福井大学の木村優さんと多少のやりとりをしましたが、私は思わぬ勘違いをしていました。というのは、当初から「学びの共同体」（協働学習）の研究会だと思ひ込んでいたのです。そのことに気がついたのはsession Iのポスターを見たときでした。気持ちを立て直してその後のsessionに参加しました。

さて、2日目のラウンドテーブルでは、全校で「学びの共同体」（共同学習）にとりくんで3年目になる本校の概要と私の授業（数学）を報告させてもらいました。

昨年あたりから授業者である自分自身の思いや生徒の学びのディテールをレポートに記述して、どんな働きかけをすればどんな学びが起こるのか、どんな課題のときに学びが進むのか等々を分析・検討してもらいたいと強く思うようになっていました。というのは、「学びの共同体」や協働学習を県内の高校教員に話しても、授業過程での学びの議論まで入っていかなくて、協働学習もなかなか広がらないということがあったからです。

しかし、いざレポートを書こうとすると、グループでの生徒の対話記録を部分的にしか拾うことができず、今回のレポートも「実践報告」というよりは「状況報告」になってしまいました。

そのこともあってか議論は授業そのものよりも「学びの共同体」そのものに傾斜してしまいました。参加者のみなさんの関心からもそれは仕方のなかったことかもしれませんが、私自身は少し残念で反省しきりで

す。

ともあれ顔をつきあわせての議論ゆえ、そして他の報告よりも時間をとっていただいたこともあり普段は気づいていなかった視点での意見もいただけて感謝の気持ちでいっぱいです。「困難」を抱える生徒たちの多い高校での「学びの共同体」を独自に創り出しているという新たな決意が固まりました。

「学びの共同体」にとりくみ出して3年、この学校を学ぶ組織にしなければならない、実践コミュニティにしなければならないと強く思うようになったのはここ1年の間のことです。導入した頃は、「20年間、研究授業なんかしたことがなかった」と話していた同僚たちでしたが、なんとか生徒の立場での授業研究にとりくめる高校になりつつあります。「困難」な課題は山積していますが、かつてのような先が見えない徒労感はありません。

最後に、福井大学の「教職大学院」が教育委員会と連携して「実践し省察するコミュニティ」というテーマを掲げ、学校改革に挑戦する教師たちを送り出しているということに衝撃を受けました。出会った福井県内の高校の教師たちの多くは教職大学院で学んだいわゆるミドルリーダーでした。学校を実践コミュニティにするという壮大な事業にとりくむ教師たちが隣県にこんなにもたくさんいることに励まされると同時に、滋賀の遅れを痛感した2日間でした。

同志社中学校 井口 和之

Zone Dで掲げた「教科を問い直す なぜ学ぶのか」というテーマの場合、私がこれまで参加した研究会のほとんどは、同じ教科の教員が集まって語るというものでした。

ラウンドテーブルに初めて参加した私にとって、他教科、異業種、大学院生、公民館職員などを交えて教科のことや学力について討論するというのは本当に新鮮で、とても刺激的でした。

報告は幼稚園や小学校での特別支援教育の実践報告（宮澤啓子氏）とインターンシップとして中学校で奮闘している大学院生の報告（北島正也氏）、そして私の中学社会科の授業実践報告と、一見すると関連性が小さいように感じるものでしたが、討論の中で、子どもたちの学びの根幹の部分に共通するものがあることが明らかとなりました。

それは、子どもたちが「安心して学ぶ」ことができる空間が幼稚園や学校内に築かれていなければ、私たち教員が期待するような「子どもどうしでの学び合い」も「子どもの協働的な学び」も成立しないということです。

私の問題関心は教科センター方式（教科教室制）の校舎建築を生かした授業展開とはどういうものか、また、こうした校舎建築を生かそうと教員が教材研究をしていくためにはどのような教員集団が形成される必要があるか、というものでした。私が所属する同志社中学校は2010年度の移転を機に、教科センター方式を採用しました。ハードとしての校舎建築を終え、いよいよ次はソフトとしての教材研究だと考え、社会科の授業を通じてグループ学習や発表形式の授業、ロール

プレイなどをどんどん取り入れ、時には教室にとどまらない授業を行ってきましたが、その背後で、子どもたちは「今までは1人で気楽に授業を聴いていればよかった。でも教科センター方式の校舎はいつでもどこでも誰かと一緒にいなければならない……」というようなプレッシャーを感じる。1人になれない。周囲に気を使わなければならないことが増えてしんどい。」というような感情を抱いていたのです。教科の学びをよりよいものにしようと建築した校舎で、子どもたちは疲れてしまうというのでは本末転倒です。こうした複雑で繊細な人間関係に一喜一憂している子どもたちの現実をふまえないままに、「協働学習」の長所だけを語ることがいかに危険であるか、今回の宮澤・北島両報告を聞いて痛感しました。

宮澤報告では「気がかりな」子どもを変えようとするのではなく、それを支える大人が変わらなければならないことが示され、北島報告ではまさにインターンとして子どもと接する中で「深化」していく教師の姿が明らかになっていました。両氏の報告は私の実感そのものでした。

ラウンドテーブルの真骨頂とでもいえましょうか、多様な体験を語り合うことで、自分の課題の解決にいたる「導きの糸」が紡がれていくという印象をうけました。教科を問い、学力を問う際には子どもの現実を知り、大人のほうが成長していく必要があるという、当たり前のことを再認識することができました。ぜひまた、ラウンドテーブルでお互いの実践を交流し、成長の機会を得たいものです。

神奈川県私立カリタス小学校 中村 恭子

今回のラウンドテーブル参加者は400人近くにもものぼり、こんなにもたくさんの方が自分と同じように、日々教育現場で試行錯誤しながら実践していることを実際に目にせず嬉しい気持ちになりました。私たちは、5人で語り合いました。初めて会う方ばかりで緊張もしていましたが、その方たちの話は共感できる場所が多く、気がつくグループのメンバーと温かい気持ちで言葉を交わしていました。誰かの実践も、自分のことと重ねながら話を聴くことができました。

実践を語るための資料作成では、頭の中がごちゃごちゃになることもありましたが、書き綴るうちにすっきりして実践しているときには思ってもみなかったことに気づくことができました。さらに、それを語ったことでも新しい発見がありました。

グループの中には公民館主事の方がいて、その方の実践はまるで学校の地域版でした。あくまでも主体は“市民”。私たちが学校で行っているこの活動は、必ず未来でも生きてくると実感することができました。

本校では、学校内でも“実践を語り合う日”を設けています。少人数のグループに分かれて互いの実践を



語っていきます。学外への発表は初めてでしたが、いつもとは違う反応が新鮮でした。また、初めての相手ということで、ささいな悩みも赤裸々に打ち明けることができたように思います。正直な自分で語ることができた気がします。このように、自分の実践について様々な意見や感想をいただけたことはとても幸せなことです。自分自身でもゆっくりとふり返ってみる機会には本当に貴重なものでした。

公開研究会参加報告

埼玉県立新座高等学校・東京大学教育学部附属中等教育学校

2012年2月中旬、埼玉県立新座高等学校と東京大学教育学部附属中等教育学校を訪問し、両校の公開研究会に参加してきました。それぞれの学校訪問で授業を参観し、授業研究会に参加する中で私たちが学び、考えたことを報告いたします。

教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校インターンシップ

佐々木 庸介

2012年2月15日、私は埼玉県立新座高等学校に訪問させていただきました。前年度の福井大学ラウンドテーブルでの発表を拝聴し、ぜひ一度授業を参観してみたいという思いがあったからです。

私は社会科の授業を参観させていただきました。授業は南北問題の導入を「チョコレート」という題材から考えていくものでした。授業が始まると先生は買ってきたチョコレートを見せながら生徒と対話を始めました。授業の開始当初は生徒が思い思いの活動を行っていたのですが、先生が一人ひとりの生徒の声を丁寧につなぎ合わせることで、生徒は次第に課題へ引き込まれていきました。学級の至る所で行われていた様々な会話が次第に課題に関連する会話へと変わっていったのです。そして、アフリカのカカオ栽培と奴隷に関する資料を学級全体で丸読みすることになりました。読んでいる生徒が分からない言葉や漢字に直面したときに、周りの生徒が読み方を教えたり、あるいは一緒に考えたりということが至る所で行われていました。この間先生は、生徒同士の対話がヒートアップしてしまいそうになったところや、つながりが薄いところへと回っていき、そっと肩をトントンと叩きながら生徒に内省を促していました。読み終わったところでカカオ栽培が盛んな国の位置を白地図で確認して色を塗るというグループ活動を始めました。ある女子生徒は「分からないよ」とまわりの生徒に助けを求めながらも協働しながら活動を進めていきました。そしてさらに、授業が終わっても活動が終わらないグループもありました。

この授業において、私は、互いに支え合いながら協働学習する「温かな雰囲気」を強く感じることができ

ました。この「温かな雰囲気」は、先生が、生徒一人ひとりの声を大切に紡ぎ合わせることで生徒同士の心をつなぎ、そして課題意識を共有していったことによって生じたのではないかと考えます。さらに、生徒も「風邪大丈夫？」と先生を気遣う場面があり、先生自身も生徒に支えられているように感じました。この温かな雰囲気によって、生徒同士が「分からないよ」と助けを求め、そしてそれを支えることで、支え合いながら協働することの心地よさを感じることができると感じました。

この授業参観によって、日々の授業実践を省察することができました。授業を行う際に、自分の授業の筋に生徒を乗せようとして、生徒同士のつながりを無視していなかったらどうか。生徒に私の気持ちが伝わらないときに大声で伝えようとしていなかったらどうか。授業で作り出す課題は本当に生徒の思いを反映したものになっていたらどうか。私は生徒をケアし、そして生徒同士のケアをうながしていただろうか。また、生徒のケアをしっかりと受け止めて私自身の気持ちを伝えられていただろうか。このような授業実践の問い直しによって、私は、自己の授業観が大きく変容したように感じています。

授業は、協働することを楽しく感じることができると同時に、生徒が日常を問い直すことができるように構築しなければならないと思います。今後私は、学級において互いに支え合う温かい雰囲気をつくりながら、生徒と生徒、生徒と課題、そして生徒と私自身がつながりあうことができる授業を目指し、省察的实践を行っていきたいと考えています。

教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校インターンシップ

森崎 岳洋

2月14日に埼玉県立新座高等学校を見学してきました。私はこの学校を本から知りました。本では授業の中で机の形を「コの字型」やグループ学習などの協働学習を取り入れることによって生徒の視線を交わらせ、生徒同士のケアを促進していく取組についてナラティブに語られていました。見学前に本を読み直し、どんな生徒がいるのだろうか？どんな授業が行われる

のか？見学の日が近づくにつれて私の期待は膨らんでいきました。

見学当日、本で紹介されている以上の不器用ながらもお互いにかかわろうとしている生徒の様子に驚きました。授業中、生徒は難しい言葉や分からない事に対して雑談を始めるなど、学びから逃避しようとする場面が何度もありました。しかし、その都度授業者の先

生がそばに寄り、粘り強く生徒と教材、生徒間の言葉をつなげている姿がとても印象的でした。また、私が授業者だったら諦めて逃げ出したくなる状況の中で先生は粘り強く生徒の発言をつなげている様子に心を打たれました。そのような授業者の働きかけにより、その後の生徒のグループ学習での没頭を見ることができました。

授業後の研究会では新座高校の先生方と県内外の高校の教員が参加して行われました。各先生方、特に新座高校の先生方の語りは、生徒の背景まで読み取ろうとしている語りでした。生徒の学びを生徒の実際からみとることで生徒観が変わり、生徒観が変わることで

自身の授業が変わっていく。この言葉がとても印象的でした。また、協働学習をただ単に取り入れるだけでは不十分であるということも先生方の語りから感じました。課題の質と協働との両輪をうまく機能させることによって、学びが深まり協働の必要感がことを改めて実感しました。

今回の見学を通して、子どもの姿から授業を語ることと子どもをみとり、教師がそれを言語化していくことの大切さを感じました。今年度で卒業ですが、教職大学院で学んだ「語り」を今後とも継続し、子どもの学びをより豊かにとらえることができるようにしていきたいと思います。

教職専門性開発コース1年／福井県立藤島高等学校インターンシップ

前田 恵子

2012年2月、授業実践が終わり、「教育」「学び」「教師」「協働」「探究」とは何なのかが分からなくなり思案していた時期に埼玉県立新座高等学校を訪ねた。

新座高等学校では、「学びをつむぐ」の著者である金子奨氏の授業を参観し、その後、金子氏とお話をすることもできた。金子氏の授業を参観し、お話を聴いていく中で、自分自身の授業への取り組み方を再度見つめ直そうと感じた。考えることから逃げずに、向き合わなければならないと思った。

今回の参観の中で強く印象に残っているのが、「コの字型やグループ学習は方法でしかない」「グループ活動は協議をする場ではなく、他の人の意見をきく場・新しい意見に触れ合う場」という言葉である。当たり前のことかもしれないが、それさえ見えなくなっていた自分自身に気付かされた。なぜ協働させるのか、生徒どうして話をさせることにどのようなねらいがあるのか、しっかりと考えた上で授業を構成していかなければならないと改めて感じた。

また、私が授業の中で大切にしたいと考えている点にも気付かされた。参観した授業は、チョコレートの原料であるカカオの生産過程で子どもたちが働かされている現実が書かれた資料を一人一文ずつ読んでいき、いくつか問答を繰り返す。そして、カカオの生産国の場所を白地図の中から探して色を塗っていくとい

う内容であった。私は、クラスの中で一番後ろの席に座る男の子に着目して参観していた。他の人が音読をしているとき、彼は周りをきよるきよると見回したり、隣に座る男の子に話しかけたりしていた。一見授業に参加していないように見えるが、時々、資料を読みながら「ひどいな、これ」「かわいそう」とつぶやく。白地図を塗るときには周りの生徒と雑談をしながらも「インドネシアってここで合っている？」と確認をしながら一步一步着実に進んでいく。彼は、特に熱心に授業に参加していた生徒、というわけではないが、授業から離れすぎず、時々どっぷりと授業の中に、クラスの中に入っていき、彼が周りの人に問いかけることで、周りも立ち止まって一緒に考える。授業の中心ではなく、周辺にいる生徒が授業の中に入っていき、彼の姿を見ていて、私はこの授業が「本当にいい授業だな」と感じた。生徒にとって、ふと入れるように、入っていきやすい授業を作りたいと感じていることに気付かされた。授業の雰囲気や流れを作るのも教師である。こう考えていた自分自身に、この参観を通して出会うことができた。

最初に述べた私自身の悩み、綻びがあったからこそ、今回の参観で気付かされたことが多くあったのだと感じている。問い直すこと、見つめ直すこと、そして学び進もうとすることを忘れずに、これからも学び続けていきたいと思う。

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校インターンシップ

河野 紘典

2月18日に東京大学附属中学校（以下、東大附属中学校と表記）の研究集会に参加しました。東大附属中学校の研究主題は「学びの質を高める協働学習～教科の特性に基づく学びとは～」であり、私が参観した社会科の2つの授業でも、生徒たちが協働学習を行うように展開されていました。

今回、中学1年生の社会科の公開授業で、私はある1人の男子生徒の学びを追いかけながら、協働学習の大切さに気づかされました。私が参観した授業は「義和団事件とは何か」という課題に向かって、教師から配

られたワークシートと4つの立場で書かれた義和団事件に関する史料をもとにジグソー学習を行う展開でした。

私が追いかけた男子生徒は、最初に自分と同じ史料の担当となったグループに移動しました。彼は、男子2人・女子3人の計5人グループの中で史料を読み解くことになりました。まず、彼は1人で史料を読み取ろうとしましたが、自分だけではなかなか史料を読み解くことができず、グループの話し合いに耳を傾けるようになりました。グループでは女子生徒3人を中心に作業が進ん

であり、彼は今この文を読んでいるのかすぐには分からないようでした。彼は隣の男子生徒と一緒に、女子生徒に何度もどこを読んでいるのか、どんな意味なのかを教えてもらいながら、メンバーがワークシートに書いたことを写し、一生懸命自分のワークシートを埋めていきました。この5人グループのとき、彼はあまり発言せずに最初のグループ活動が終わりました。

このあと、彼は4人1班になり、それぞれがグループで調べてきた4つの史料を説明し合う活動をします。私が最も驚いたのは、前のグループではあまり発言しなかった彼が、班に戻るとグループの司会をする姿を見たことです。彼は、自分が担当した史料も自信をもって説明し、質問対しても自分なりに考えて説明していました。他の人の説明も聴き、わからないことには質

問してグループで「義和団事件とは何か」を考えていき、まとめて授業は終わりました。

私は彼の学びを追いかけて、最初のグループで一緒になって悩んだ男子生徒の存在や何度も教えてくれた女子生徒のおかげで、彼は授業に参加できたと思いました。分科会でも、授業者は1人では解けないような史料を用意し、必然的に協働しないと行けないよう意図されていたことを知りました。私は東大附属中等学校の授業参観とその後の研究会を通して、教科としての深まりまでは見取ることはできませんでしたが、課題が難しすぎても支えあう集団であれば協働学習することによって解決可能なこと、また、協働学習を通して生徒同士が支えあう重要性を実感することの大切さを学びました。

平成23年度第2回運営協議会が開催

福井大学教職大学院
津田 由起枝

平成24年3月21日（水）に平成23年度第2回運営協議会が開催されました。梅澤章男・教育学研究科長のあいさつ、松田通彦・福井県教育庁企画幹のあいさつに続いて、全体協議及びグループ別協議を持ちました。



福井県教育庁企画幹 松田通彦

全体協議では、以下の内容が協議され、いずれも原案どおり承認されました。

- ①平成23年度年間報告及び平成24年度年間計画（案）について
- ②平成24年度学生募集状況について
- ③教職専門性開発コース修了者の就職状況について
- ④平成24年度免許更新講習スケジュールについて

その後のグループ別協議は、拠点校・連携校、県教育委員会、市町教育委員会の6グループに分かれ、現状報告や今年度の成果・課題、要望等、活発な情報交換・意見交換が行われました。その中からいくつかを紹介します。

- ・毎年両コースの院生を受け入れてきた拠点校では、学校体制としての受け止めが定着し、院生にとっても学校の教員にとっても学びが深まるという好循環が生まれている。
- ・若手の院生に対しては生徒も教員として受け止めており、教員よりも相談しやすい様子である。学校にとってもありがたい存在で、次年度も来てほしいと考えている。授業研究会への参加や授業実践を積極的にいき、子どもを見る目ができつつある。
- ・若手の院生の中には指導の必要な院生もおり、大学として事前指導を徹底させてほしいと感じた。さらには直接関わるメンター教員が評価に関わることができないか。
- ・スクールリーダーについて、1年目は自己中心性もありやや心配な部分もあったが、2年間で、大きな変容を遂げた。冷静に自己を振り返ることができ、協働的に取り組む学び方を会得することができた。そこに、校内での立場があれば、どんどん学びを広めることができる。その院生一人の学びにとどめるのではなく、周囲を巻き込んで全体として教師力を高めることにつながられた。
- ・拠点校でも学校の状況や院生の考え方により、受け止めや関わりは様々である。スクールリーダーについてはどうしても中堅になり、学校での役割も大きくなる。しかもその年齢は家庭にとっても大事な存在である。土日に行われるカンファレンスやその後のレポート提出は、時間的・労力的に非常に厳しいものがある。大学としてもできるだけ負担軽減策を取ってほしい。経済的な困難も続いているが、状況が徐々に好転しており、むしろ、時間的な負担の方がネックになる。

- ・どちらかという教科専門性の指導が弱く感じる。大学内でもっと教科との連携を深めてほしい。
- ・日常的な学校の課題と研究課題がリンクすれば、院生の業務遂行や資質向上にもなり、学校の課題解決にもつながる。教職大学院に院生を送り出す側としては、そういう体制を作ることが必要である。
- ・学校ではベテラン教員も多く、中堅の教員といえども学校を動かすようなポジションを得られないままの教員もいる。今後、指示待ちでなく学年や学校の中核として自ら考え動ける教員をいかに育てるか、若手教員にどうつなぐかは学校としての大きな課題。そのことを意図した教員配置が必要。研修が必要なのは、若手もベテランも同じ。その意味でも教職大学院での学びは重要な核となる。



2011年度長期実践研究報告の目録

No.	学校改革実践研究報告	氏名
115	子どもとのかかわりから教師としての自己を確立する	内田 真希
116	様々な関わりを通して子どもが多様な楽しさを実感できる授業の実現 ～実践の省察・参観・理論を通して「学びを楽しむ」の本質に迫る～	内山 里香
117	子どもの思いを受け止めて関係性を築く	斉川 歩
118	「生徒が探究する授業」を構成する省察的実践の過程 ー「自己の重層的省察」と「生徒・同僚・先輩との協働学習」をナラティブに捉えてー	佐々木 庸介
119	「人」を大切に作る教師に一子どもとのかかわり方の変容についてー	高村 領
120	子どもと共に創りあげていく教育観・授業観ー学びのつながりに目を向けた二年間ー	土田 真衣子
121	子どもの力を引き出すことのできる教師を目指してー自己の思考の変容と子どもの成長過程をふまえてー	法山 裕子
122	「活躍できる授業」が高める学習意欲 ー「楽しい授業」を目指し続ける自己の変容ー	林 克磨
123	生徒の学びと教師の学びとの相互作用で創る授業ー授業観の変容過程を通してー	森崎 岳洋
124	中学年の授業づくり	伊東 直子
125	教師と生徒が主体的に参画する学校づくり ーつながりあって育つ学校～社会参画型学力の育成～	見崎 洋之
126	「中堅」から見た、これからのリーダー像	竹林 史恵
127	至民中学校の足跡ー新しい中学校教育への挑戦ー	金鑄 善朗
128	地域との協働，連携でつくる	宇野 秀夫
129	連携による特別支援教育ー家庭・地域・小学校・専門機関・職員間の連携を通して	宮澤 啓子
130	教科を越えた教職員の協働による研究体制の構築 ー丸岡南中学校研究主任としての3年間を振り返ってー	渡邊 朋重
131	教師が学び合い成長する学校をめざして	坂下 博行
132	授業研究を考えるー実践者として，コーディネーターとしてー	川畑 成央

133	一人ひとりの学びを協働で生み出すコーディネーター（研究主任・学級担任）として	森北 良嗣
134	伝え合い、学び合う学校づくり	松見 浩司
135	スーパーサイエンスハイスクール (SSH) における協働的活動の取組	富澤 宏二
136	大学院での2年間の学びとこれからの自分 ーすべての出会いを伸長の糧とし、これからも素敵な出会いを求め続けていきたいー	島田 一博
137	「互いに高め合う教師集団」をめざして ー病弱特別支援学校における児童への支援と同僚教師への支援を中心にー	戸田 典子
138	生徒からの学びを基軸に据えた新たな生徒指導の種をまく ー生徒指導の視点から、教員の意識改革を図るー	久島 晋
139	園や学校を支える福井県特別支援教育センターの役割を協働で再考する ー実践コミュニティを支えるコーディネートの役割ー	西尾 幸代
140	生徒の主体性を育てる授業を目指して ー高等学校での授業研究を基盤として生徒に授業で学ぶことの価値を再認識させるー	川合 浩介
141	子どもの学びとそれを支える教師の協働	浅野 尚美

スタッフ紹介

教育地域科学部支援室 青山 佐織

平成24年2月1日付けで教育地域科学部支援室の事務補佐員として配属されて2ヶ月が過ぎました。医療事務、DTPオペレーター、歯科助手、法律事務と色々な職種に携わってきましたが、教育機関というのは初めてで、どういう仕事をするのだろうかと不安でした。今も前任の西本さんに支えられながら何とか仕事をしている状態です。3月に行われましたラウンドテーブルが特に印象的で、数百人規模にも驚いたのですが、学生からベテランの先生方が入り交じっての発表や意見の交換をされているのが、すごく不思議な感覚で、でも楽しそうにも見えました。前職場での6年間は、いかにぬるま湯に浸かっていた状態で仕事をしていたのかと、痛感する毎日を送っていますが、できるだけ早くスムーズに仕事ができるように頑張ろうと思っています。

日本教育方法学会第48回大会のご案内

2012年10月5～7日、福井大学にて、日本教育方法学会第48回大会が開催されます。日本教育方法学会は、戦後の授業研究運動を背景に1964年に設立した学会で、教育方法（教育内容を含む）全般にわたる研究の発展と普及をはかり、相互の連絡と協力を促進することを目的としています。大会の詳細については後日改めてお知らせいたしますが、教育方法学研究としても福井から新たな提起を生み出し、教育方法学研究史に残る大会にしたいと思っています。大会当日、福井大学で皆様とお会いするのを楽しみにしております。（遠藤貴広）

Schedule

4/7 sat 開講式 4/21 sat -22 sun 4月合同カンファレンス
4/28 sat -29 sun 4月合同カンファレンス(予備日)

[編集後記]

今回のラウンドテーブル特集号はいかがだったでしょうか。お寄せいただいた玉稿は、字数を制限してでも、なるべく多くの参加者の声をとという編集方針から、当日、執筆の御相談をさせていただいたものが少なくありません。ありがたいことに、何れも御快諾いただいた上に「書いて」くださる方ばかりでした。心から感謝申し上げます。あの2日間が参加者をどう触発したのか、その一端が読者の皆様にも伝わるものと信じます。そして今、季節はまさに出会いと別れの春。教職大学院開設前から力を尽くされた長谷川先生の巻頭言を心に刻み、スタッフ一同、着実に歩を進めていく所存です。（吉村治広）

教職大学院Newsletter No.41

2012.4.7発行

2012.4.7印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdftukui@yahoo.co.jp

